



第百五十四號

(第十四卷)

昭和九年二月

昨年(1933年)の天文界の回顧

われ等にとり、昨1933年は数々の興味と記憶に値する事が多かつた。今其中の主要なるものだけを個條書にして見ると、

(1) **土星面に白斑現はる** 正に57年ぶりの珍らしさで、1933年八月3日以來、約三ヶ月にわたり、土星の白斑は人を惹きつけた。発見者は、獨のエルバ・英のヘイ、米のキリス、佛のケニセ諸氏。

(2) **蛇遣ひ座新星** 八月中旬に突如として増光し、其の12日には實に4等級に昇つた。吾々北半球者には1920年以來の珍象であつた。十月初、キルソ天文臺長アダムス氏は此の星のスペクトル中に太陽コロナと同じ5303Å及び6734Åの輝線を發見した。

(3) **6彗星の發見** うちd(カラスコ)彗星は要領を得なかつたが、a(ペルテヤ)星とf(ホイブル)星とは全くの新來星。又、b(シンネケ星)とc(ジャコビーニ星)とe(ワルフ星)とは週期彗星の再歸であつた。今一つ待望のフインレイ星は遂に發見されなかつた。

(4) **十月9日の大流星雨** 之れはジャコビーニ彗星と軌道を同じくするもので歐洲の空にのみ現はれ、其の盛大なる狀況は正に百年ぶりのものであつた。

(5) **獅子座流星群の大觀測網** 本會と花山と大毎と三つ協同の全國的大觀測網は實に未曾有の計畫であつて、無慮一千名のアマチュアが參加した。寫眞も五六枚優秀なものが獲られた。

(6) **小遊星の總數1264個** 又、四月22日南阿ジョハネスバークで1933HHとい等10ふ級の高速星が発見され、 $\mu=2860''$ のものとして、一時注目されたが、六月末、之れは(192)Nausikaaであると立證された。

(7) **冥王星の質量** 光度は14.9、色指數+0.9と決定、従つて質量は地球の十分の一程度と判明、して見ると、トリトン星の兄弟分らしい。

(8) **太陽の新活動始まる** 十月29日、南半球高緯度に一新黒點群現はれ、十二月12日には北半球にも同様な新群が発見された。いよいよ此れで太陽は第30期の活動を始めた。

(9) **國際經度觀測** 九月15日から三ヶ月間、第二回國際經度觀測が世界を通じて行はれ、我が國では花山と三鷹とが之れに参加した。結果は近く公表される筈。

(10) **日本三代表外遊** 木村榮博士は緯度觀測狀況視察のため、夏には濠洲へ、秋には南阿と南米へ出張。新城新藏博士は第5回國際測地學地球物理學同盟總會のため九月リスボンへ出張。山本一清博士は第5回太平洋學術會議のため六月北米へ出張。其他、水澤の川崎技師も外遊中。數少い天文學者の中、一時に四人も外遊するのは珍らしい。我が天文學界も愈々多事である。

(11) **二大遊星の掩蔽** 年末十二月20日、金星と土星とが相前後して月に掩蔽され、何れも東亞のみで觀測し得る都合であつたが、何れも首尾よく觀察された。

1934年の天文界は

- A. 二月14日に我が南洋領で皆既日食が見え、内地でも部分食が見える。
- B. 週期彗星として歸來するのは、フルフ、タトル・ジャコビニ、エンケの三つ。
- C. 實地天文學の完成者ベセルの誕生後正に150年。
- D. 太陽物理學の開拓者ヤングの誕生後正に100年。